

公

開稽古は、思いのほかお客さんが来られたうえに落語家の満足度も高かったたので、直後から妄想が暴走気味だ。黙っておられず、構想の一つを妻に話したら、また始まったという表情でたしなめられた。これでいくらか鎮まつて少し落ち着いて考えられるようになるのだが、これもやっぱり相変わらず繰り返している。たぶん死なないと直らない。

今、塾の教室で使っている実家を片づけたとき、ほぼすつからかんになつた部屋を見渡していたらふと浮かんだ。ここで落語会をやろうと思えばできるじゃないか、と。思いついてしまえばあとは妄想の出番となり、プランだけは次々と具体化していった。東奥谷寄席という名前から、月々招く落語家まで浮かんで、町内のお年寄りたちが座布団や椅子に開演よりずっと早くに座つているところだつて見えてくる始末だ。さすがにこのときは妻に話す前に「いや、こぎやんせめとこで（こんなせまいところで）駐車場もない（ないのに）無理だ」と現実が見え、壁に貼つたポスターみたいに関心が薄れていった。

今回の稽古は、手製のめくり台の横で子どもが座布団に座つて話し、向かい合つたお客さんが拍手をした、声をかけたりしているのだから、公開稽古とは言い条、まるで高座そのものだった。そしてこれは、消

えたはずだつたかつての妄想が少しばかり形を変えてそのまま実現したのでつた。

公開稽古後に、そういえばこの光景を思い描いたことがあつたぞと気づくまで、ぼくはかつての妄想を一度も心に浮かべたことはなかつた。これを不思議と名付けて引き出しにしまつてもいいのだけど、なんでこうなつたのか、おもしろいから考えている。

塾を始めるのも、実家を教室にするのも、落語教室を併設するのも、どれもぼくの発案ではなく、積極的になれかつたばかりか、あれこれ理由を挙げて反対さえした。もしかつての妄想がぼくの胸の中で消えることなく息づいていたら、しめしめと思つて飛びついたことだろう。かといつてすつかり忘れていた妄想と公開稽古の光景はまったく無縁で偶然に過ぎないとも思えない。妄想の記憶が意識に上らないだけで脳内か体内のどこかに残つていて、磁石みたいにそれへ近づけたのか。こうも考えた。空想とその実現が一人の中で連続するとは限らない。本人のあずかり知らぬところでだれかの加工を経て形になるのでは。だとしたら、憎悪が生み出す妄想にもそんな力があるのだろうか。正視が憚られる悲惨な光景が日々流れる。笑つちまうほど無力だが、ならばぼくは、せつせとご近所や子どもたちの笑い顔を思い浮かべることに努めよう。



空き家 28

木幡智恵美

生家の思い出⑮

土の香りが消え、父の虚栄のような雰囲気の家から遠のいた私は、新しい土地での暮らしの方に馴染んでいく。その間、家の状況は様変わりしていた。オイルショックを何とか切り抜けた父は凶に乗つたのか、三軒目の工場を建てたり、不相応な事務所を作つたりしていた。母の言うことに耳を貸さず、返すためにまたお金を借り、雪だるま式に借金が膨らんでいるとのことだ。突然母が下宿に転がり込んできたのは三年生の時。そこで初めて家の状況を知らされた。何事にも耐え抜いてきた強い母が、急に小さくひ弱に見えた。これからは、私が母を守らねばならない。

それでも、仲間との関係も断ちがたく、心は揺れていた。先輩のしごきに共に耐え、汗し、語り合い、絆を深めてきた仲間の存在がどんどん大きくなつていて、この地で働きたいと思うようになっていた。揺れる心のまま、四年生に突入、二箇所

の教員採用試験を受けた。地元の二次試験の案内がポストに入った日、母がまた下宿にやつてきた。父の事業はのつびきならぬ状況に陥つていふこと。二次試験を受けには帰らないつもりでいたのだが、案内を母に見られてしまつていふ。しかも、その時の母の様子からして、この先父と二人にはできないのではないかと思つたのだ。

希望していた事務所から採用の通知が来たが、父の「家に戻れ」の一言で、泣く泣く断りの連絡を入れた。オイルショック後わずかの期間で事業を行き詰らせ、家を抵当に入れ、母を苦しめた父を責めつつ、父なりに必死だつたらう、そして、こうなつた今、家族揃つて危機を乗り越えたいのだろうか、あれこれ思いめぐらしながら、地元での就職を決めた。

島根半島の小さな町の小学校に赴任し、何年も経つたと思える三か月半が過ぎ、母が犬を連れて間借りをしている家に転がり込んできたのは夏休みに入つてすぐのこと。父は借金の返済に駆けずり回つていふこと。自分も働いて少しでも返済したいので、働き先と一緒に探してくれとのこと。幸い授業がないので休みを取り、暑

30代フリーター 伊藤貫という、ワシントン在住の国際政治アナリストが、こんな趣旨のことを言っている。日本が世界の覇権闘争に本格的に巻き込まれたのは、歴史上あとにも先に1894年の日清戦争開始から1945年の日米戦争の終結までのたった50年間だけだった。ほとんどの日本人にとって、それは悪夢のような50年間で、あんなことにもう二度と巻き込まれたくないと思った。

年金生活者 欧米諸国が何世紀にもわたって覇権をめぐる戦争で勝ったり負けたりを繰り返してきたのに対し、私たちの国はわずか半世紀の間に経験した何回かの戦争で最後に一度負けただけで、「もう戦争はこりごりだ」と公言するようになった。日本人にとってその半世紀は「例外の半世紀」だった。欧米の歴史を物差しに考えれば、あり得ないことに違いない。

30代 そんな日本人がなぜか大日本帝国の時代には極端なほどナショナリズムを高揚させた。

アメリカが日本の占領、従属国化に「成功」したのは世界的には例外的な出来事だった。そのもとは、大日本帝国の時代が日本の歴史の中で例外的な時代だったことにある。

30代 「いつでも戦争するぞ」と世界を脅しつける超大国と、「戦争だけはごめんだ」と考える極東の島国がこれから先、ワシントンの指示で軍事的な一体化の道を進めば、どこかでその矛盾が噴出する可能性がある。

年金 岸田政権による防衛費の爆増を、国民の多数はとりあえず中国やロシアの脅威に対して保険をかけるつもりで容認するだろう。ただし、それはあくまでも軍備を更新して抑止力を高めるためであって、実際にそれを使って戦うという事態、つまり自衛隊員が血を流し、敵のミサイルに脅える日々を国民は想定していないはずだ。だとしたら、いくら防衛費を増やしても抑止力の増強にはならない。使う覚悟のない軍備は張り子の虎と同じだからだ。

年金 それは欧米の列強に強いられるものであり、もともと国家意識の強くなかった日本人にとってはしぶしぶ選んだ道だった。だから、「帝国」が敗戦で崩壊したとたん、国家を国家たらしめるはずの戦力を否定する憲法を進んで受け入れた。

大日本帝国が成立する前の日本は、対外的には中国の臣下の地位にあり、対内的には権力が地方に分散した封建制のもとにあった。つまり、国といえど、中国の従属国か、多数ある藩を意味した。

そこへアメリカが「主権国家」の原理を黒船に積んでやってきた。国家はひとひとつが独立した存在であり、他国に支配されることなく、国民を統治する絶対的な権力として「主権」を有するというイデオロギーだ。主権の中には戦争をする権利も含まれていて、日本はうかうかしている、それらの主権国家に征服されるかもしれないという危機感が一気に高まった。

30代 そのときから日本は自らも主権国米政府も日本の政府もそれを感じながら、あたかもタブーのようにそれに触れないようにしているように見える。それを言い出せば、アメリカの世界戦略に大きな穴があることを認めることになる。もしそれに目をつぶったまま、例えばアメリカが台湾有事を名目に戦争を始めても失敗する可能性がある高い。

家へと舵を切り、近代化を進めてきた。**年金** それは日本人に相当な無理を強いたはずだ。国家のない縄文時代が1万年以上も続いた結果、国家を考えないメンタリティーが日本人の中に形成されていたからだ。縄文以後、国家をつくることはつづけたが、それは周辺国を臣下とみなす冊封体制の中国に強いられて「仕方なく」つづけたものと推定される。

そんな日本人がこんどは欧米の外圧によって「仕方なく」大日本帝国をつくった。侵略されるかもしれないという恐怖に駆られ、欧米の「主権国家」以上の強い「主権」を目指した。言い換えれば、強がること、強いと信じることを強いられた。

そんな突っ張りほろくもあつた。アメリカに完膚なきまでに打ちのめされたばかりか、その従属国化に甘んじた。アフガニスタンやイラクのように占領されたあととも武装勢力が激しく抵抗し、米軍を撤退させるといようなことはまったく起きなかった。

30代 支持率を上げることが最大の関心事であるような岸田政権が、台湾有事のことを本気で気にかけているとは思えない。

年金 朝日新聞の世論調査（10月14、15日）で岸田内閣の支持率が29%に急落し、発足以来最低となったのは、いざというとき何もできない政権だと国民から見透かされた結果だ。ハマスとイスラエルの軍事衝突に対する基本姿勢が数日で変わる政権のブレがそれを浮き彫りにした。

欧米諸国がハマスの奇襲を「テロ」と非難し、イスラエル支持を鮮明にする中で、岸田文雄は「テロ」という言葉を使わず、双方に自制を求めるコメントを出した。日本は原油の9割以上を中東に依存しているからだ。

ところが、数日後、官房長官がハマスの行動を「テロ」と断じ、あつさり軌道修正した。自国の生命線にかかわる問題すら、アメリカの圧力で取り扱いかえてしまうような政権に、国民は危うさを感じたに違いない。

ニュース日記 897
中村 礼治

例外の半世紀